

未来の自分への「貢献」

周防大島町立大島中学校 3年 松永 瑞葵

「二百五十七円。」

店員さんがレジに打った、この数字を見て、私は少し損した気持ちになる。消費税の十九円を抜いた「二百三十八円」を支払う気だったからだ。ニュースでアナウンサーが

「税金について…。」

という言葉を知ったり、「税」の文字を見たりすると、私は自然と「負担」といったマイナスなイメージを抱いてしまう。その理由の一つは、レジ前での損した気持ちの積み重ねだと思う。もう一つの理由として、歴史の授業の税金へのイメージだ。昔の日本では、国民にとっての税金は、厳しい内容の納税、苦しい労働という日々の暮らしを苦しめるものだったそうだ。あまりの苦しさから、税から逃れるために逃亡する人もいたほどの辛さだったということがとても印象に残っている。

そんな私の中の税金のイメージを変えたのは、自分で「所得税」について調べた時だ。きっかけは、母と姉の会話の内容だった。私の姉は大学生で、アルバイトをしている。そんな中、母が姉に、

「毎月いくらくらい？所得税は？」

と言っているのを聞いて、私は所得税が何なのか気になった。調べていくうちに、「所得税」とは、個人の所得にかかる税金のことをいい、会社で給料をもらっている人など利益を得ている人にかかるもの、ただし年間収入が、百三万円以下の場合にはかからないことを知った。また、所得税には、国民の間の所得格差を調整する役割があることも知った。その時、私が払った税金にはその後や税がある目的、理由があるというあたり前だが、見逃していた部分に気付いた。そこに視点を当ててもう一度、調べてみると、払う税だけではなく、税金の使いみちである、教科書や医療、道路や学校など、私がたくさん関わっているものの存在を初めて知った。改めて考えてみると、身近なところにたくさんの税がいて、誰かのためになっている。税金の意味や理由や目的に焦点をあてることで、払うのが嫌で損した気持ちになる税金ではなく、私達国民のため、会ったことのない誰かが笑顔になれる税金だと考える機会となった。

税について調べることで、税金のイメージが大きく変わった。税金を払うことで、自分ではない誰かのためになるかもしれない。そう考えると、納税は募金とよく似ていると思う。「負担」ではなく「貢献」、納税は私達国民の未来のため。これからは明るい気持ちで税と向き合っていこうと思う。